

映像講座では、問一、問二、問三、問六、問七、問八、問九を解説しています。

問題三 次の文章は『堤中納言物語』の一節で、主人公の中納言が、宮中での管弦の遊びのあと、中宮付きの女房たちに声をかけられる場面である。全体を読んで、あとの問いに答えよ。

御遊びはてて、^A中納言^B、中宮の御方にさしのぞきたまへれば、若き人々、心地よげにうち笑ひつつ、「いみじき方人参らせたまへり。あれこそ」など言へば、「何事せさせたまふぞ」とのたまへば、「明後日^(注3)、根合侍り^(注4)。潮いづかたにか寄らむと^(注2)思しめす」と聞こゆれば、「あやめも知らぬ身なれども、引き取りたまはむ方にこそは」とのたまへば、「あやめも知らぬ身なれども、^X右には不用にこそは。さらば、こなたに」とて、^(注5)小宰相の君、押し取り^aきこえさせつれば、御心も寄るにや、「かう仰せらるる折も侍りけるは」とて、にくからずうち笑ひて、出でたまひ^イぬるを、「例の、つれなき御気色こそわびしけれ、かかる折は、うち乱れたまへかし」とぞ見ゆる。

右の人、「さらば、こなたには^(注6)三位中將を寄せたてまつらむ」と言ひて、殿上と呼びにやりきこえて、「かかることの侍るを、こなたに寄せたまへと頼みきこゆる」と聞こえさせれば、「ことにも侍らぬ。心の思はむ限りこそは」と、たのもしう^Pのたまふを、「さればこそ。この御心は、そこひ知らぬ泥^(注7)にもおり立ちたまひなむ」と、かたみに羨むも、宮はをかしう聞かせ^Qたまふ。

中納言、さこそ心に入らぬけしきなり^bしかど、その日になりて、えも言はぬ根ども引き具して、^R参りたまへり。小宰相の局に、まづおはして、「心幼く取り寄せたまひしが心苦しきに、若々しき心地すれど、^(注7)安積の沼をたづねてはべり。さりとて、負けたまは^ウじ」とあるぞ、たのもしき。いつのまに思ひよりけることにか、言ひ過す^{すく}べくもあらず。

右の中將おはしたらむなり。「いづこや、いたう暮れぬほどぞよからむ。中納言は、まだ参らせ^Sたまはぬにや」と、まだきに挑ましげなるを、^(注8)少將の君、「あな、^Yをこがまし。御前こそ、御声のみ高くておそかめれ。かれは、しのめより入り居て、^c整へさせたまふ^エめり」など言ふほどにぞ、かたちより始めて、同じ人とも見えず恥づかしげにて、「ⁱⁱなどとよ。この翁、ないたう挑みたまひぞ。身も苦し」とて、歩み出でたまへる。御年のほどぞ二十に一、二ばかり余りたまふ^dらむ。「さらば、とくしたまへかし。見はべらむ」とて、人々参りつどひ^オたり。

方人の殿上人、心々に取り出づる根のありさま、いづれもいづれも劣らず見ゆる中にも、左のは、なほなまめかしきけさへ添ひてぞ、中納言のし出でたまへる。^(注9)合せもて行くほどに、^(注10)持にやならむと見ゆるを、左の、はてに取り出でられたる根ども、さらに心^eおよぶ^エべうもあらず。三位中將、いはむかたなくまぼり居たまへり。「左勝ちぬるなめり」と、方人のけしき、したり顔に心地よげなり。

（『堤中納言物語』）

(注)

- 1 中宮……中納言のきょうだい。「宮」も同じ。
- 2 方人……左右に分かれて競う場合に、その一方を応援する人、一方に属する人。
- 3 根合……左右に分かれて、菖蒲しやうぶの根の長短を競う遊戯。
- 4 潮いづかたにか寄らむ……「左右どちらに味方なさるでしょう」の意。
- 5 小宰相の君……中宮付きの女房のひとり。
- 6 三位中将……中納言とライバル関係にある貴公子。
- 7 安積の沼をたづねてはべり……福島県安積山の麓にあったとされる沼。「菖蒲のない沼を一心に探してきた」の意。
- 8 少将の君……中宮付きの女房のひとり。
- 9 合せもて行く……くらべ合わせて行く。
- 10 持……引き分け。

問一 二重傍線部 a「きこえさせ」・ b「しか」・ c「整へ」・ d「らむ」・ e「およぶ」はいずれも活用語である。それぞれの活用形として最も適切なものを、次の中から一つずつ選べ。同じ選択肢を繰り返し選んでもよい。

a b c d e

- ① 未然形 ② 連用形 ③ 終止形 ④ 連体形 ⑤ 已然形 ⑥ 命令形

問二 波線部ア「せ」・イ「ぬる」・ウ「じ」・エ「めり」・オ「たり」の文法的説明として最も適切なものを、次の中から一つずつ選べ。

ア イ ウ エ オ

- | | | | | | |
|---|----------|----------|------------|------------|----------|
| ア | ① 受身の助動詞 | ② 尊敬の助動詞 | ③ 使役の助動詞 | ④ 推量の助動詞 | ⑤ 動詞の一部 |
| ア | ① 受身の助動詞 | ② 尊敬の助動詞 | ③ 使役の助動詞 | ④ 推量の助動詞 | ⑤ 動詞の一部 |
| イ | ① 打消の助動詞 | ② 尊敬の助動詞 | ③ 過去の助動詞 | ④ 完了の助動詞 | ⑤ 推量の助動詞 |
| ウ | ① 過去の助動詞 | ② 打消の助動詞 | ③ 打消推量の助動詞 | ④ 意志の助動詞 | ⑤ 禁止の終助詞 |
| エ | ① 打消の助動詞 | ② 完了の助動詞 | ③ 打消推量の助動詞 | ④ 現在推量の助動詞 | ⑤ 推定の助動詞 |
| オ | ① 断定の助動詞 | ② 完了の助動詞 | ③ 過去の助動詞 | ④ 現在推量の助動詞 | ⑤ 推定の助動詞 |

問三 二重傍線部 O「思しめす」・ P「のたまふ」・ Q「たまふ」・ R「参り」・ S「たまは」の敬意の対象として最も適切なものを、次の中から一つずつ選べ。
同じ選択肢を繰り返し選んでもよい。

O

 P

 Q

 R

 S

- ① 中納言 ② 三位中将 ③ 中宮 ④ 右の方人 ⑤ 左の方人

問四 波線部 X「右には不用にこそは」のあとには、どのような語句が省略されていると考えられるか。最も適切なものを、次の中から一つ選べ。

- ① あらむ ② あらぬ ③ あらず ④ あらめ ⑤ ありつる

問五 波線部 Y「をこがまし」の意味として最も適切なものを、次の中から一つ選べ。

- ① 失礼だ ② だらしない ③ ばからしい ④ せっかちだ ⑤ 暑苦しい

問六 傍線部 A「中納言」・ B「中宮」・ C「小宰相の君」・ D「三位中将」・ E「少将の君」は、左右どちらの「方人」か。それぞれ最も適切なものを、次の中から一つずつ選べ。 同じ選択肢を繰り返し選んでもよい。

A

 B

 C

 D

 E

- ① 右方 ② 左方 ③ どちらでもない

問七 傍線部 i「この御心」は誰のどのような心を指しているか。最も適切なものを、次の中から一つ選べ。

- ① 根合への意欲をあえて隠す中納言の心
② やる気と自信に満ちた三位中将の心
③ 中納言の活躍を期待する小宰相の君の心
④ 三位中将をひそかに恋い慕う少将の君の心
⑤ 根合を成功させようと意気込む中宮の心

問八 傍線部 ii 「などとよ。この翁、ないたう挑みたまひそ。身も苦し」の説明として最も適切なものを、次の中から一つ選べ。

44

- ① 中納言の対抗心が激しいため、勝敗を判定することに辟易^{へき}して弱音を吐いた翁のことば
- ② 三位中将の対抗心が激しいため、勝敗を判定することに辟易して弱音を吐いた翁のことば
- ③ 挑戦的な三位中将とは反対に、翁を自称して謙遜してみせる、ユーモアを交えた中納言のことば
- ④ 挑戦的な中納言とは反対に、翁を自称して謙遜してみせる、ユーモアを交えた三位中将のことば
- ⑤ やる気のない中納言を翁にたとえて煽^{あお}る、対抗心をむき出しにした三位中将のことば
- ⑥ やる気のない三位中将を翁にたとえて煽る、対抗心をむき出しにした中納言のことば

問九 本文の内容と合致するものを、次の中から一つ選べ。

45

- ① 中納言は、宮中における根合をきっかけに、中宮付きの女房と恋仲になろうと積極的に言い寄ったが、三位中将に先を越されて恋は成就しなかった。
- ② 中宮付きの女房である小宰相の君と少将の君は、お互いの恋人を方人を選んで、宮中で根合を行ったが、結果は引き分けになってしまった。
- ③ 中納言は、中宮付きの女房から誘われて、宮中で行われた根合に方人として参加したが、慢心と油断による準備不足で負けてしまった。
- ④ 三位中将は、宮中で行われた根合において、中宮付きの女房達から活躍を期待されていたが、相手方の根に圧倒されて負けてしまった。
- ⑤ 三位中将は、宮中で行われた根合の準備のため、遠方の安積の沼まで足を運んだが、根合の当日に遅れて参内して中宮に怒られてしまった。